

## ルターの「信仰」を問う

末竹 十大

### 一 はじめに

ルートヴィッヒ・ヴィトゲンシュタインはこのような言葉を残しています。「感覚にはたらしかけられないもの、たとえば数、のほう<sup>〔1〕</sup>が、『純粹』である」。感覚に惑わされるとき、人間は正しい判断ができなくなるものです。そのような意味でヴィトゲンシュタインが言うように「数」というものには惑わしはない。このような純粹さは我々キリスト者の信仰にも言えることではないでしょうか。

いわゆる塔の体験においてマルティン・ルターが経験した解放と自由とは、感覚的なものではなく、純粹さの体験であり、彼自身のうちから発したものでなかったでしょう。というのは、それまでの彼の苦悩の中で、師であったシュタウピッツから受け継いだ神秘思想は、「脱自」や「拉致」を教えていたからです。「脱自」とは自

分自身の外に出ることであり、「拉致」とは神によって捕らえ移されることでした。これらは自らの感覚的世界を越えた出来事としての神秘的体験を語っている言葉です。

マルティン・ルターは「信仰義認」を再発見したと一般的に言われていますが、当時の神学用語としては義認の教理のことです。この義認の根拠が何であるかを端的に示すために聖書翻訳において「信仰によってのみ義とされる」とルターは訳しました。ローマの信徒への手紙第三章二八節の翻訳において、あえて「のみ」(allein)を挿入することによって、「明確なドイツ語を提供しようと努力した」と、ルターは自らの立場を語っています。しかし、このような信仰義認における「信仰」というものが行為義認と対置されるとき、我々人間から発した信仰であるかのように捉えられ、義と認められる信仰を、感覚を通して確認できる信仰として求めることにもなるでしょう。

我々人間が確認できる信仰であれば、信仰義認とは人間的行為が人間的信仰に置き換わっただけだということになります。行為によって神に義と認められるということと信仰によって義と認められるということとは同じ次元の事柄であって、その確信の根拠を人間的な感覚に置くことになります。行為義認の方がまだしも客観的なものだと言えるでしょう。ルターが行為義認と同じ次元で、つまり人間的な次元で信仰を考えていたのであれば、依然としてルターは苦しんだことでしょう。自らが確認できる信仰が、ルターが捉えていた信仰なのでしょう。この点を明確にすることで、ルターの信仰義認理解の内実を捉えることができるのではないかと考えます。

## 二 ルターとアウグスティヌスの義認理解

信仰義認については、使徒パウロの手紙において語られています。ルターもパウロ書簡において義認論を理解しました。最初はアウグスティヌスの義認論に従っていたと言っていますが、パウロに目覚めたところから「アウグスティヌスから離れた<sup>(3)</sup>」と言って、卓上語録ではアウグスティヌスの義認論を批判しているのです。その批判はこのような言葉です。「アウグスティヌスの見解によれば、理性の力により行われる律法は、（自然法によって行われる）よい行いによって異教徒が義とされないように、義としない。しかしもし聖霊が与えられるならば、その律法行為は義とされよう。このようにアウグスティヌスは主張して、ここでは、律法あるいは理性の行為が人を義とする問題ではなく、聖霊により行われた律法が人を義とするかどうかの問いなのである。これについては、わたしは『否、律法を聖霊の力により完全に成就する人は神の憐れみを懇願しなければならない。神は律法によってではなく、イエスによって救済すると定めている。いかなる行為によっても安らかな心は得られない。キリストがわたしたちのために服従した律法により苦しめられなかったならば、霊においてキリストは決して悲しまなかったであろう』と答えた<sup>(4)</sup>」と言い、「アウグスティヌスは義認論の箇所を正しく理解しなかった<sup>(5)</sup>」とも言っています。アウグスティヌスは、聖霊の力によって行われた「律法行為」が義とされると語っているがゆえに、行為を行わせるのが理性か聖霊かの違いがあるとしても、行為が義と認められることが語られています。ルターはこの見解を批判しているのですが、実際アウグスティヌスの義認の考え方は行為義認に傾いていま

す。それは其勸説を唱えるようになった「恩恵と自由意志」(四二六―四二七年)以降のことです。

アウグスティヌスはペラギウスとの論争(四一一―四一八年)の際、「自由意志はない」と明言してはいませんが、そう受け取れる発言をしています。しかし、論争後、自由意志を否定すれば人間が責任をもって生きることができなくなると批判されて執筆した「恩恵と自由意志」(四二六―四二七年)の中で「共働説」を唱えました。その前提として、「自由意志はある」と明言しているのです。<sup>(6)</sup> その上でこう語っています。「恩恵が遠ざかれれば、その人は倒れ、自由意志によって立ち直ることもなく打ち倒されてしまうのです。それ故に、人間は善い功績を得はじめた後も、その功績を自分ではなく、神に帰さなければなりません。」<sup>(7)</sup> と。これが、アウグスティヌスが語る「共働説」です。

また、「自由意志はある」とアウグスティヌスが語る意図は、人間が悪を行うときにその罪責を神に帰すことなく、自らの意志に帰するようにと勧めるためです。<sup>(8)</sup> そしてこう語っています。「また、人が神にしたがって何かあることを行うとき、そのことを(自分)固有の意思から切り離してはなりません。実際、(神にしたがってそのことを自ら)意思して行うとき、その行いは善いといわなければならず、その善行の報酬は、『各人にその行いに応じて報いる』(マタイ一六・27、ローマ二・6、黙示録二二・12)といわれるお方から(受けることを)希望することができるはずです」<sup>(9)</sup> と。ここでアウグスティヌスは「善行の報酬」に言及していますが、結局行いを功績と語っていることになります。

先に見たルターの義認理解はあくまで「神の憐れみを懇願する」信仰を語っていました。憐れみを懇願するということは、義ではない者が神の憐れみを懇願すること、神の力を懇願することを語っているわけです。そうだ

とすれば、ルターは人間的次元での信仰と行為との差し替えを考えているのではないと思われます。このようなルターの義認理解における信仰を問うためには、聖書的信仰理解をまず考えてみなければなりません。なぜなら、ルターが捉えている信仰は聖書において明らかに語られている通りの信仰であるはずですから。

### 三 聖書における信仰義認の表現

信仰義認という言い方は日本語では信仰によって（あるいは信仰が）義と認められるという意味の用語です。義と認めるのは神であり、信仰を持っているのは人間であると一般的には理解されています。果たして、パウロの語る信仰義認は人間の信仰なのでしょうか。パウロが信仰義認について語っているローマの信徒への手紙を見てみましょう。

まずは、ローマの信徒への手紙一章一七節に引用されている「正しい者は信仰によって生きる」というハバクク書二章四節のヘブライ語原文です。

יְהוָה יִחְיֶה בְּיָדֵינוּ  
וְיִחְיֶה בְּיָדֵינוּ

「義人は、彼の信仰のうちで（によって）生きる（あるいは、生じる）であろう」（私訳）と語られています。

す。「彼の信仰のうちで」と言われているように、信仰は義人が持っている信仰です。このヘブライ語原文の *יְהוָה* の場合、義人自身が信仰のうちに包まれているような状態を語っているとも解することができます。彼の信仰のうちに包まれている者が義人 *יְהוָה* であり、義と認められた者と解することができるでしょう。

この聖句が引用されているパウロ書簡のギリシア語ではこうなっています。

*ὁ δὲ δίκαιος ἐκ πίστεως ζήσεται.*

「しかし、義人は、信仰から、生きるであろう」（私訳）

この七十人訳では、

*ὁ δὲ δίκαιος ἐκ πίστεως μου ζήσεται.*

「しかし、義人は、わたしの信仰から、生きるであろう」（私訳）となっています。

ヘブライ語原文が「彼の信仰」となっているのに、七十人訳では「わたしの信仰」となっています。これは、ヘブライ語では、*אֱלֹהִים* の違いになり、七十人訳が使ったヘブライ語写本が *אֱלֹהִים* だったということです。この場合、神ヤーウェが「わたしの信仰から生きるであろう」と語ったことになります。これが *אֱלֹהִים* に替わっている BHS の場合、その写本家の信仰理解によって変更されたのではないかと考えることができます。

パウロ書簡の引用に戻ってみますと、「信仰から」となっています。「信仰によって」や「信仰のうちで」では

ありません。しかも「彼の」または「わたしの」という所有格さえも付いていないのです。パウロは七十人訳から「わたしの」を取り除き、ヘブライ語原文からは「彼の」を取り除いています。そうして、所有格のない「信仰」にした。どちらとも言えないと考えたからかもしれません。

パウロ書簡の「信仰から」とは信仰を起源としてということであり、信仰が義人の生の起源であると言われています。ということは、義人は信仰を生の根源として生きるであろうということです。ここには所有格がないように、「信仰」そのものが生の根源であることが語られていると言えます。

では、ローマの信徒への手紙四章三節に引用されているアブラムの信仰が義と認められたという創世記一五章六節ではどうなっているでしょうか。

# וַיִּשְׁמַע אֲבְרָהָם וְהָאֱלֹהִים וַיִּבְרָא אֵלָיו

「そして、彼は信じた、ヤーウェのうちで。そして、彼は算入したそれに対して（彼に対して）、義を」（私訳）がヘブライ語原文です。ここでの義認には、計算して入れること、考えることを意味する *ps* が使われています。これと同じことを意味するギリシア語 *λογίζμαι* がパウロ書簡には使われています。七十人訳ではこうなっています。

*καὶ ἐπίστευσεν Ἀβραμ τῷ Θεῷ, καὶ ἐλογίσθη αὐτῷ εἰς δικαιοσύνην.*

「そして、アブラムは信じた、神に。そして、それは算入された、彼に、義へと」（私訳）

パウロ書簡では接続詞 καὶ を δε に変更し、 Ἀβραμ を Ἀβραμ に変更しています。

ἐπίστευσεν δὲ Ἀβραὰμ τῷ θεῷ καὶ ἐλογίσθη αὐτῷ εἰς δικαιοσύνην.

実際は、この時点ではアブラムであり、アブラハムではなかったのですが、あえてアブラハムにしています。しかも、καὶ を δε に変更していることを考えれば、信じがたいにも関わらず、アブラハムは「しかし、信じた」のだと述べるためだと考えられます。従って、アブラハムは信じていることができないのに信じたのであり、彼の信仰ではないと考えることができます。先に見たハバク書「彼の信仰のうちで」というヘブライ語原文が、その人が包まれている「信仰」を語っているとすれば、その人から発した信仰ではない信仰だと考えることもできるでしょう。それが七十人訳の「わたしの信仰のうちで」であれば尚更です。

聖書が語る「義と認める」という事柄は神が認めるのですが、それは義ではない者を数え入れるということです。義であるから認めるわけではありません。数え入れるという言葉によって示されているのは、算入することであり、考えること、つまり見なすことです。<sup>(10)</sup> 義と見なすことが義認なのです。

金子晴勇は『近代自由思想の源流』において、アウグスティヌスの義認論の中に「成義」と「宣義」の二つの意味があることにルターは気づき、「宣義」の方が適切であると語っていると述べています。「宣義」とは「義人



とみなされ、判定される」ことだとルターは語っていると金子は「ローマ書講義」の第二章一三節のスコリエを引用しています<sup>①</sup>。そうであれば、宣義は義人と見なすこと、義人ではないが義と見なすということになります。ルターの義認論はパウロの義認論で使用されている *λογίζομαι* と *νομίζω* に従って理解していることになります。

では、義に算入される「信仰」とはいったい誰のものであり、何を起源としているのでしょうか。アブラハムにしても、ハバククが語る義人にしても、その人の信仰が義に数え入れられるとすれば、信仰はその人のものです。そうでなければ、その人は誰かのもので義に数え入れられることになり、その人自身の義とはなり得ないでしょう。その人自身の信仰を義と見なすのであれば、行為としての義と対置された形で信仰が考えられていることになります。あるいは、信仰は義ではないが義と考えようということなのでしょうか。または、その人は行為的には義ではあり得ないが信仰を持っているので、その信仰を行為的義と考えてあげようということなのでしょうか。しかし、義とは何かが分かなければ、義と認めることの意味を理解することはできません。

#### 四 旧約聖書における義とルターの義理解

『旧約聖書神学事典』（教文館、一九八三年）の「義」の項で並木浩一はこう語っています。「義は神もしくは人について、正しい行為や挙動、正しい事態、正当さ、救済などの広い語義領域に当てられて、これを総括的に表す用語として使われている」と。日本語訳では義は神対人の縦関係と人対人の横関係に区別して訳されています。

すが、「旧約の世界のような団体主義的傾向の強い社会においては、正しさに関わる縦と横の区別はつけにくい」と語っています。十戒においても神との関係を始まりとしながらも人との関係に移行していくことを見れば、縦関係が横関係に関わっていること、発展していることは明らかです。ルターも第一戒がすべてを包括する戒めであると見ています。<sup>(13)</sup>ルターを理解は神対人における義がすべてを貫いているという理解です。

ルターの大教理問答書における理解に従えば、義は神に従うことです。<sup>(14)</sup>ルターを理解は、義は義である神に従うことです。信仰は神への従順ですから、信仰自体が義ということになります。あるいは、信仰が外的な義を働くとすれば、義を働く主体が信仰であると言えます。これについては、「キリスト者の自由について」一三段において、「しかし、私たちはここで、行いのように、行為者が行うものを求めているのではなくて、神を崇めて、行いを行う行為者自身、すなわち、行いの主体を求めているのである。これは心の信仰以外にはない。これこそ義の首で<sup>かしこ</sup>あり、義の全本質である。」とルターは語っています。<sup>(15)</sup>しかし、信仰自体が義のかしら、義の全本質であるならば、あえて「それを義へと算入する」とは言わないでしょう。算入される信仰ということは、義ではないがあえて義へと算入される信仰のほずです。しかし、この信仰が我々の信仰ではないとすれば、どうでしょうか。

ルターは「キリスト者の自由について」（一五二〇年）の二年後一五二二年に執筆した「ローマの信徒への手紙序文」で「義」と「信仰」についてこう語っています。「しかし信仰は私たちのうちにおける神の働きである。この神の働きは私たちを変え、私たちを神によって新しく生まれさせ——ヨハネによる福音書第一章「二節」——古いアダムを殺して、私たちを、心、勇氣、感覺、あらゆる力をもった別の人間とし、聖霊をもたらし」と<sup>(16)</sup>

語って、信仰は神の働きだと言っています。しかしまた「信仰とは神の恵みに対する生きた、大胆な信頼であり、そのためには千度死んでもよいというほどの確信である」と語っていて、われわれ人間の確信であるようにも語っているのです。そして「むしろ、神が働きかけて、信仰をあなたのうちに起こしてくださるように祈るがよい」と言います。ルターが捉えている「信仰」とは、神ご自身がわれわれ人間のうちに働いて起こし給うものであり、起こされた信仰によって、われわれは神の恵みを確信することです。

さらに「義」についてはこう語っています。「『義』とはそのような信仰のことであり、神の義とか、神のまえで妥当する義とか呼ばれる。それは、この義が神の賜物であって、人間をして、だれに対しても自分の責めを果たすような者であらしめるからである。」と語って、「義」と「信仰」を同じものとルターは考えています。

このようなルターの義理解は、パウロや聖書そのものが語る義理解と同じなのでしょうか。先に見たように「義へと算入される」信仰は、義ではないが算入されるのだとすれば、信仰は義ではないということになるのですが、ルターは信仰は義であると述べています。

しかし、義ではない信仰とは信仰ではないでしょう。なぜなら、義は神との関係を義しくされていることだからです。信仰も神との関係において義しくされた状態を表しています。神との義しい関係に入れられることが義であるならば、信仰は義なのです。しかし、義しくされる途上にある者は未だ義ではないが義となりつつあると言えます。あるいは信仰を神が起こすのであるならば、その人自身が起こした信仰ではないが、その人が神によって信じるようにされていることが義だということになります。

信仰を起こされても、信仰が行為の主体として働いていないならば未だ完全に義となっていないのです。そ

うであれば、義認とは義となりつつある者として「義に算入される」ということになるでしょう。信仰を与えられてはいるが、信仰が主体となるまでにその人の中で成熟していないとしても、義と認められるということ、つまり宣義ということです。

「キリスト者の自由について」七段において、そのような信仰を鍛えたとルターは語っています。<sup>(20)</sup>さらに、二段においては身体を信仰に服従させることが語られて内的と外的な人間全体の聖化が語られています。ルターの義認論が「宣義」と「聖化」であると述べた金子晴勇の指摘は、「ローマ書講義」における聖書釈義から義認を理解するようになったルターを語っているのです。「聖化」についても、ローマの信徒への手紙第六章一九節、二二節に明らかに語られており、コリントの信徒への手紙一、九章二七節「しかし、わたしはわたしの体を打ちのめして、奴隷化している。他の人に宣教している者自身が不適格者とならないために」(私訳)やフィリピの信徒への手紙第三章一二節「わたしはすでに取ったわけでもないし、すでに終極に達してしまっているわけでもない。」(私訳)以下で語られている目標を目指すキリスト者の生き方を見る限り、ルターの信仰理解、義認理解は聖書的、パウロ的であると言えます。

## 五 教理問答における信仰

ルターは小教理問答書の使徒信条の第三条「聖化について」の項でこう語っています。「私は信じている。私

は自分の理性や力では、私の主イエス・キリストを信じることも、そのみ許に来ることもできないが、聖霊が福音によって私を召し、その賜物をもって照らし、正しい信仰において聖め、保つてくださったこと(註)を。」と述べて、人間が自分の理性や力では信じることはできないと語っています。従って、神の賜物としての義である信仰を与えられて、信じるとルターは語っていることになります。これが「宣義」における信仰でしょう。さらに「正しい信仰において聖め、保つてくださった」と語ることにおいて、「聖化」が語られていると言えます。これに続いて、終わりの日に至るまでの聖化が語られています。この場合の「正しい信仰」はよく働く信仰であり義の全本質だと言えます。

以上のことから考えれば、ルターが捉えている信仰とは、神（神の言葉）から人間に与えられたもの、あるいは神（神の言葉）によって起こされたものです。このような信仰については、「注入された信仰と獲得された信仰」（二五二〇年）という討論においてルターが論じているところです。

## 六 注入された信仰

ルターの「注入された信仰と獲得された信仰」をまず引用します（『ルター神学討論集』、金子晴勇訳、教文館、二〇一〇年、一九〇―一九二頁）。

## 注入された信仰と獲得された信仰

サクラメントの受領における信仰の必然性についてマルチン・ルター博士の一九の提題

- 一 サクラメントに与ろうとする者にとって注入された信仰が絶対的に必要である。
- 二 注入されないで獲得された信仰は無であって、獲得されず注入された信仰がすべてである。
- 三 注入された信仰は獲得された信仰なしには活動しないと主張することは、神に対する冒瀆である。
- 四 獲得された信仰は注入された信仰なしには悪だけを働く。
- 五 スコラ神学の博士たちが（サクラメントを受領する際に）心のよい動きは必要でないと主張するのを聞くのは、恐るべきことである。
- 六 殺害を意志したり、それと類似のことを意志することは、（サクラメントの受容に）妨害を置くことを意味するなら、ましてやこのことは不信仰に当てはまる。
- 七 信仰の外に立っている人は、必然的に、また、いつでも恩恵に対する妨害を所有している。
- 八 妨害を取り去るか、それとも初めから妨害を置かないような力を人間に与えていない人たちは、彼ら自身の妨害を理解していない。
- 九 獲得された信仰は神の言葉を守らないばかりか、絶えず吐き出す。

- 一〇 獲得された信仰はダチヨウの羽であるが（ヨブ三九・13）、注入された信仰は生命の霊である。
- 一一 また注入された信仰だけが不敬虔な者らを義とするのに充分である。
- 一二 確かに何らのわざなしに信仰のみでないなら、信仰は虚しく、義としない。
- 一三 わざは信仰の義認に誤ることなく続く。なぜなら信仰は不活動ではないから。
- 一四 わざを伴わない信仰は死んでいると言われていることは正しい、いや、それは〈全く〉信仰ではない。
- 一五 注入された信仰は獲得された信仰から、一方、活動と対象によって、他方、習性と目的によって区別される。
- 一六 七つのサクラメントのどれも聖書においては「サクラメント」の名前で評価されない。
- 一七 聖書はただ一つのサクラメントをもっており、それは主なるキリストご自身である。
- 一八 新約のサクラメントは、恩恵をすべての人に約束しているが、信仰者にのみ恩恵を授ける。
- 一九 旧約のサクラメントは信仰と愛によって起こっていても、義としなかったと言われていることは正しい。

金子晴勇の解説によれば「注入された信仰」とは洗礼の際に注入された信仰です。（二）で述べられているように、幼児洗礼において注入されてもそれだけでは何の力もなく、後に「獲得された信仰」が加わることで「注入された信仰」が働くようになるとオッカム主義者ガブリエル・ビールは主張していました<sup>(2)</sup>。ルターはこれを「神への冒瀆」（三）だと述べて、退けています。「キリスト者の自由について」において、ルターが信仰を鍛えたと述べている「信仰」はこの「注入された信仰」であって、ビールが考えたような「獲得された信仰を加え

る」ことではなく、あくまで与えられた「信仰」の鍛錬なのです。

この討論提題の（二）と（四）において、ルターは「獲得された信仰」という名目を認めているように思えますが、それは「奴隸的意志について」において「自由意志」を「人間の下にある事柄」に限定して認めていることと同じでしょう。<sup>(24)</sup> それゆえに、（四）において「獲得された信仰は注入された信仰なしには悪だけを働く。」と述べているのです。（二）において「注入されないで獲得された信仰は無であって、獲得されず注入された信仰がすべてである。」と述べていることは「自由意志は無である」<sup>(25)</sup>と述べる「奴隸的意志について」の論理と同じです。

その上で（一一）において「また注入された信仰だけが不敬虔な者らを義とするのに充分である」と述べています。従って、ルターが捉えていた信仰義認における「信仰」は「注入された信仰」だということになります。

以上の考察から、ルターの「信仰」は人間の力によって「獲得された信仰」ではなく、神の力によって「注入された信仰」であり神の働きだということが明らかになったと思います。従って、ルターの信仰義認理解においては、人間的行為の位置に人間的信仰（人間の力によって獲得された信仰）が置き換えられたのではなく、神の義が与えられて、信仰を起こされ、その信仰のうちに入れられて義と認められることが語られていると言えます。<sup>(26)</sup>

ルターが理解している信仰義認とは、神が不信仰者に信仰を起こし、信じる者にして（義化）、その信仰を義と認める（宣義）ということです。この宣義に基づいて、終わりの日までの聖化が聖霊によって継続されるのです。先に見たように、これはパウロの語ることも一致しています。この信仰は、キリストそのものであり、不



信仰者がキリストと一体とされる神秘的出来事だとルターは理解しています。この点については、「キリスト者の自由について」の一二段においてベルナールの花嫁神秘主義をルターの信仰理解に従って改訂して提示していることから明らかです。「信仰は、魂が神のことばと等しくなり、すべての恩恵で充たされ、自由に救われるようにするばかりでなく、新婦が新郎とひとつにされるように、魂をキリストとひとつにする。」<sup>27</sup>と。この信仰は人間のものではなく、神（神の言葉）が起こし給うた信仰です。

ルターの信仰理解は聖書的であり、信仰と義は神のものを人間に与えることであり、与えられ起こされた信仰はその人の信仰として義を働くようになるということです。パウロがコリントの信徒への手紙一章九節や一章一三節で言うように、神こそが *fides* を体現しているお方 *fides* なのですから、このお方が与えてくださる信仰は、人間的感覚ではない純粹な信仰だと言えます。この信仰が義と見なされる信仰であり、行為と対置されることのない信仰なのです。

注

- (1) L・ヴィトゲンシュタイン『反哲学的断章―文化と価値』（一九三七）、丘沢静也訳、青土社、一九九九年、八二頁。
- (2) M・ルター「翻訳についての手紙」、『ルター著作集』第一集9巻、聖文舎、一九七三年、三四四頁。
- (3) M・ルター『卓上語録』植田兼義訳、教文館、二〇〇三年、三七頁（語録八二、TR 1, 347）。
- (4) 同上、三八五頁（語録一〇六八、TR 1, 85）。
- (5) 同上、三八六頁（語録一〇六九、TR 2, 1572）。
- (6) アウグスティヌス「恩恵と自由意志」二章四節、『アウグスティヌス著作集10「ペラギウス派駁論集（2）」』教文館、一九八五年、一九頁。ここでアウグスティヌスはこのように述べています。「神は「聖書の」多くの箇所、自由のあらゆる掟を遵守し、実践することを命じておられますが、これはなぜでしょうか。もし自由意志がなければ、どうして神は「以上のように」命じられるのでしょうか」と。これはエラスムスがルターに対して「自由意志はある」と述べた論理と同じです。
- (7) 同上、六章一三節、三五頁。
- (8) 同上、二章四節、二二頁。
- (9) 同上、二章四節、二二頁。
- (10) 実際、新共同訳では、ローマ八・36の詩編四四・23の引用箇所は「見なされています」と訳されています。
- (11) 「聖アウグスティヌスは『霊と文字』第六章でこの言葉を二重に説いている。第一には次のようである。『律法を行う者たちが義とされるであろう』、つまり義認以前ではそのようではなかった者たちが、いまや行為する者と成るように、義認によって生じる、もしくは創造されるであろう。第二に、かついっそう適切には『義とされるであろう』、つまり義人とみなされ、判定されるであろう」（WA, 56, 201, 10ff）。金子晴勇『近代自由思想の源流』創

文社、一九八七年、第四章「ルターのスコラ神学批判の視点」、二一八―二一九頁より引用。

(12) 新共同訳では神の義は「恵みの御業」、人の義は「正しさ」と訳し分けられています。どちらも *δικαιοσύνη* です。

(13) M・ルター「大教理問答書」、『ルター著作集』第一集8巻、聖文舎、一九七一年、三九六頁。「この第一戒が最も重要で（先に述べたように）、心が神に対して正しい関係にたつて、この戒めが守られるならば、他の戒めはすべてこれに従っておのずと満たされるからである。」

(14) 「これに反して使徒信条の教えは、恩恵ばかりをもたらし、私たちを義とし、神の御こころにかなう者とならせる。」と「大教理問答書」の使徒信条第三条「聖化について」の中でルターは述べています。

(15) M・ルター「キリスト者の自由について」『ルター著作選集』ルター研究所編、教文館、二〇〇五年、二七八頁。

(16) M・ルター「ローマの信徒への手紙序文」『ルター著作選集』ルター研究所編、教文館、二〇〇五年、三六六頁。

(17) 同上、三六六頁。

(18) 同上、三六七頁。

(19) 同上、三六七頁。

(20) 「それゆえに、みことばとキリストとを十分に自分のうちに形成し、そのような信仰を絶えず鍛え、強めていくことが、当然すべてのキリスト者の（なすべき）唯一の行いであり、訓練であるべきである。」

(21) 「ここに確かに身体は断食、徹夜、労働、その他あらゆる適度の訓練をもって駆り立てられ、鍛練されて、内的人間と信仰とに服従し、これと等しい形をとるよう、また、強制されないと（現れる）自己のやり方にしたがって妨害したり、反抗したりすることのないようにされなければならない。」（「キリスト者の自由について」、前掲、二八四頁）。

(22) M・ルター『エンキリディオン 小教理問答書』ルター研究所訳、リトン、二〇一四年、三四頁。

(23) 金子晴勇は、ピールは主義主義の立場に立っていたと言います。「信仰は自由な意志の働きによって生じ、意志の

協力によつてはじめて成立する」との彼の主張は「つまり、自由意志の力により信じるも信じないも、啓示された真理を受容するのも、しないのも可能であると説かれた」と金子はまとめています。自由意志を否定するルターはこれを批判しました。

- (24) 「すなわち、人間の『自由意志』が承認されているのは、人間の上にある事がらに關してではなく、ただ彼の下にある事がらに關してのみであるということである。」（「奴隸的意志について」『ルター著作集』第一集7卷、聖文舎、一九六六年、一七二頁）。

- (25) 同上、四一五―四一九頁。

- (26) このような信仰理解については、関根正雄が述べていることでもあります。「エロヒストにおいては『信仰』ということ、『神の畏れ』ということが、シナイ契約の箇所でもよく出てくるので、これが中心的なことなのですが、『神の畏れ』というのは『信仰』と同じなのです。しかし、『信仰』ということ、『ヘーミーン』という動詞で述べておりますが、『アーメンとする』という言葉へブライ語で申しますと『ヘーミーン』で、これは『アーメンとする』、また『アーメン』とは『堅い』という言葉ですから、『堅いとする』、つまり神の言葉が与えられると、その中に自らを堅くすること、それが信仰です。」（関根正雄『聖書の信仰と思想』教文館、一九九六年、一一五頁）。
- (27) M・ルター「キリスト者の自由について」前掲、二七六―二七七頁）。